

初夏の営農情報

JAとうと経済部農業課

① 気象予報と初期生育について

6月24日発表、気象庁3カ月予報

	平均気温	降水量	日照時間
7月	高い	ほぼ平年並	ほぼ平年並
8月	高い	ほぼ平年並	ほぼ平年並
9月	高い	ほぼ平年並	—

7月後半は、平年と同様に晴れの日が多い予報です。8月は、平年と同様に晴れの日が多く、気温は高い予報です。9月は、数日の周期で天気が変わる予報です。本年も猛暑と集中豪雨の夏になると想定されます。毎年難しくなってきたいる水稻栽培ですが、適切な水管理・肥料農薬で対応し、実りある収穫を迎えられるよう取り組んでいきましょう。

② 高温対策について

高温は、米の未熟粒発生の大いなる要因となります。また、出穂期からの肥料切れも未熟粒発生を助長しますので、適正な追肥対応が必要となります。未熟粒を減らすためには、米の登熟に必要な稲の吸水力維持・蒸散作用が維持されることが求められます。

(1) 追肥による高温対策

エムコートやS C U配合コシヒカリ一発等の一発型肥料を施肥している場合は、基本的に追肥（穂肥）の必要はないとの事でしたが、昨今の異常気象による高温化により、肥料成分の早期溶出が見られる事もある為、

葉色の落ち込みに注意し、場合によっては、追肥を施す事も必要になります。

新潟県や三重県では、高温対策として出穂期前後の追加穂肥を呼びかけており、追肥を行う事で、玄米外観品質が向上して等級が上がったという結果も出ています。その為、一発型肥料を施用している場合でも、現状ではコシヒカリやひとめぼれでは、窒素で1kg/10a（NK化成2号6kg）が目安となります。



(2) ケイ酸施用による高温対策

稲がたくさん吸収する「ケイ酸」と「加里」を吸収する事で、

① イネの姿がピンとした受光態勢づくり

稲の葉がピン立ち、下層部へ光が入る為、光合成が促進されます。

② 水分蒸散の抑制と光合成・デンプン生成の促進

ケイ酸が皮膜を作り、モミの中の水分蒸散を防ぎます。また、ケイ酸は、光合成によるデンプン生成を活性化するのにとても重要な役割を果たします。

③ 日照不足時にカリがサポート

加里肥料は「ヒカリ肥料」とも言われ、日照不足による光合成の低下を抑えます。これにより、登熟を助け、収穫量の減少を軽減します。

④ 玄米の粒厚・登熟歩合の向上。乳白粒の発生を軽減

加里の働きで、葉で作られたでんぷんを籾まで運ぶので、粒厚が高まり、登熟も良くなります。また、実入りが良くなる事で乳白粒の発生軽減も期待できます。

このような良い働きがある為、「ケイ酸」を含む資材「けい酸加里プレミア 34」を基肥として施用していない場合は、中間追肥として10aあたり20~40kgを目安に施用してください。

また、春に基肥として10aあたり40kgを施用する事で、ケイ酸資材を追肥する手間が無くなる為、基肥として施用する事を推奨します。



(3) 出穂後の水管理について

米の品質向上には、出穂後の水管理が重要です。圃場内の水が切れたら再度入水する「間断かん水」を基本としますが、猛暑による過度な水温上昇を回避すべく、こまめな水管理が必要になります。より効果の高い「飽水管理」を、可能であれば行いましょう。

稲は穂を作り始める時期から、必要とする水の量が多くなります。一方、日中の猛暑で熱せられた水温は夜間も下がりにくい為、高気温の日が続くと常時高温となり、稲が疲弊してしまいます。このため、足跡や溝に水が残る程度の状態（飽水状態）を維持する飽水管理にすることで、地温が下がりやすくなります。

※水が少ない分、気温の低下に連動する。また、気化熱により地温も低下しやすくなる。

③ 病気・害虫の対応について

1. カメムシの対策について

この地域でも様々な種類のカメムシが確認されていますが、近年では、写真のような、若干丸みのある体躯のイネカメムシが多く確認されます。

イネカメムシが出穂期に籾を吸汁する事により籾への養分の蓄積が阻害され十分に登熟できない結果、穂が傾かずに直立穂となり、収穫が皆無となるような状況も発生しています。

今までは、カメムシが出穂後に籾を吸汁し、これによる食害痕が「斑点米」になる事から、出穂後の薬剤散布を基本としていましたが出穂前からの防除も必要となっております。



イネカメムシ



斑点米被害の一例

カメムシ対策は、「スタークル」や「フジワンラップ粒剤（3kg）」などの薬剤を散布することで対応しますが、近年は、生息数が著しく増えていることから、1回では防除しきれない場合が増えています。1回目の防除以降にカメムシが確認された場合は、再度の防除をご検討ください。

【スタークル豆つぶ（250g）】

イネカメムシには、出穂10日前から出穂期頃。斑点米カメムシには、出穂7～10日後散布。水位3～5センチ程度の湛水状態で、田面に均一に散布します。

250gで10アール分となります。散布後7日間は落水・かけ流しはしないようにします。



【フジワンラップ粒剤（3kg）】

10aあたり3～4kg施用。湛水散布。収穫30日前まで。フジワンラップはウンカその他、カメムシの防除や、いもち病対策、米の登熟向上といった効果があります。これらの目的での施用の場合は、出穂10～15日前頃に、4kg/10aの施用を行います。



この他、スタークル粒剤などがあります。まずは、カメムシの早期発見のため、圃場内を常に注視して飛来がないか確認しましょう。

⊘ 農薬の使用について

ミツバチの生態に影響する恐れがあるため、蜂に影響を及ぼす農薬の養蜂地域での使用は控えるよう、ご配慮ください（各農薬の注意事項参照）。また、苗箱に箱施用剤と間違えて除草剤を散布するといった、農薬の誤用事例が増えています。全ての薬剤で使用基準を必ず確認し、適正な農薬使用をお願い致します。

2. いもち病の対策について

いもち病の原因となるいもち菌は、日照不足や長雨などで気温が20℃～28℃、稲が8時間以上濡れた状態が続くと、特に増加しやすくなります。また、風で葉が擦れて傷付いたりすると、いもち菌が稲の葉に侵入しやすくなります。



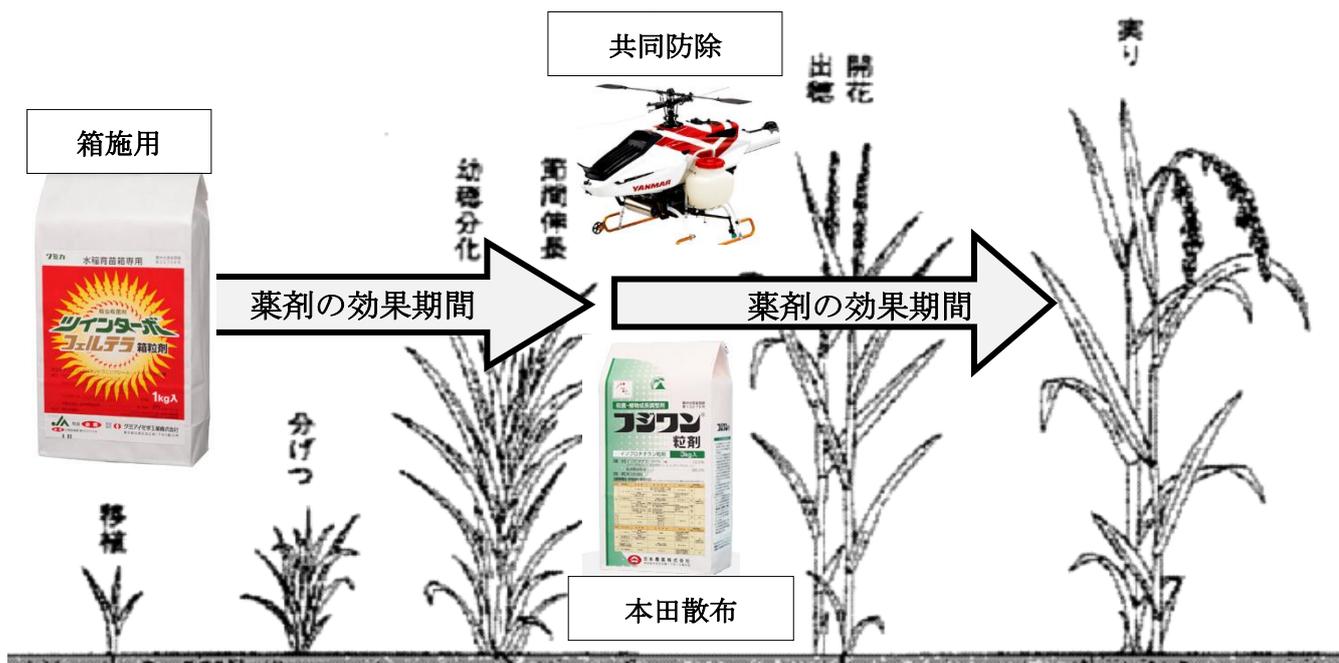
【イモチ病症状例】

左写真
黄色・黒・灰色の紋様
が発症

右写真
白いカビのような紋様
が発症



いもち病の防除には、田植え時の箱施用剤と出穂前に散布するフジワン等により、葉いもちから穂いもちまで、生育期間中のあらゆるいもち病に対応できるような、体系的な防除が効果的です。特に近年では、8月中旬以降に定期的な降雨が続く傾向ですので、フジワン粒剤を、4 kg/10a の施用を推奨します。



また、いもち病対策のフジワン粒剤に含まれる「イソプロチオラン」には、根の活力を高める効果があり、稲が水や肥料成分を吸い上げる力を維持し、籾へのデンプン蓄積を促進して、未熟粒の発生を軽減する効果もあります。「けい酸加里+フジワン」のセットで、いもち病対策と登熟向上を行い、安定した収量・品質の確保に繋がていきましょう。

④ 機械作業について

近年、全国的に刈払機での事故が増えています。慣れからくる油断で、対策を怠ることも大きな原因です。作業時の安全確保に努めてください。

【防護用の装着品の一例】

- ・ヘルメット ・ゴーグル ・フェイスガード
- ・防振手袋 ・防護服 ・脛当て ・安全靴
- ・スパイク靴

特に目への飛来物や身体への刃の接触が危険です。防護を徹底しましょう。



暑い中での作業は、熱中症や脱水症状の危険があります。こまめに休息や水分補給を行うとともに、身体に異変を感じたら、作業を止めて必要な処置を取りましょう。また、水稻共済に加入された方で、風水害、病害、虫害、鳥獣害等の被害がありましたら、岐阜県農業共済組合（東濃支所）にご連絡をお願い致します。

J Aとうと経済部農業課（栽培管理）	電話：68-5120
（瑞浪市）J Aとうと 経済センター	電話：68-5128
（土岐市）J Aとうと ふれあいパーク浅野	電話：54-7788
（多治見市）J Aとうと 多治見宮農センター	電話：27-2914
岐阜県農業共済組合（東濃支所）	電話：0573-25-8805

